

令和7年度 研究推進計画

熊野町立熊野第四小学校

1. 研究主題

主題 学校や学級をよりよくするために主体的に行動できる児童の育成（1年次）

副題 ～学級活動（1）における、課題を見付け、解決していく学級会の授業づくりを通して～

2. 主題設定の理由

本校の児童の実態を肯定的に表すときに適した言葉は「優しい」である。昨年度までの5年間、体育科の授業研究を積み重ねることで、他者を認める「共生」の考え方がしっかりと身に付いているからである。体育科の授業以外の生活場面でも様々な優しさが見られる。例えば、授業内で教え合う姿、縦割り班活動や委員会活動での異学年交流で協力し合う姿など、特定の児童に縛られることなく、多くの児童が人と関わる中で優しさを見せている。しかし、本校の児童の実態を別の側面から見てみると、「受け身」という言葉が当てはまってしまう現実もある。学ぶ基盤（学習規律や人との関わり方など）はしっかりと整っているため、児童が主体性をもって発言したり、行動したりする段階へ引き上げることで、本校がよりよくなるのではないかと仮説を立てた。

児童を受け身の状態から主体性をもった状態へ変えていくために、本校の特別活動の充実を図ることが効果的であると考えた。「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編」には次の3つの視点が示されている。それは、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」である。この3つの視点は、相互に関わり合っていて、明確に区別されるものではないことをまずは留意しておく必要がある。中でも「社会参画」については「よりよい学級・学校生活づくりなど、集団や社会に参画し 様々な問題を主体的に解決しようとする」という視点と明記されている。そのため、特別活動が本校の学校教育目標「主体的に行動できる児童の育成」にリンクしていると言える。そこで、今年度は学級活動（1）を中心に研究を進めていくこととする。主な内容は「学級会を行う基盤づくり」である。学級会とは①問題の発見・確認②解決方法等の話し合い③解決方法の決定④決めたことの実践⑤振り返りという学習過程である。この学習過程はPDCAサイクルとなっており、昨年度まで取り組んできたRT（リフレクションタイム）が活用されることも予想される。また、トークタイムで育んできた、表現力や聴き合う力も学級会で十分に生かされるだろう。この学級会を児童が中心となって主体的に進め、自発的・自治的な活動へと充実させていく。この1年間を通して、学級会を自分たちで取り組んでいく基盤をつくっていききたい。

研究主任と副研究主任を中心に組織として研究を進めていくためのキーワードが2つある。1つ目は児童も教職員も楽しむことである。学級会は今年度から新しく取り組むため、この1年間が来年度以降の重要な基盤となる。そこで、児童には「学級会って自分たちで進めることができて楽しい!」、教職員には「学級会を通して、児童が変わってきて面白い!」といった「楽しさ」を感じてもらいながら実践を積み重ねていくようにする。その「楽しさ」が同じ熱量、理解度で研究を進めていくために必要であると考えた。2つ目は揃えることである。今年度の基盤づくりにおいて各学級で揃える部分を明確にすることにより、児童は学級が替わっても困らないようになり、教職員は来年度以降の「学級会の深化」にスムーズに移行したりすることができる。2年次には、「トークタイムとの繋がり」「各教科との往還」を学級会に取り入れようと考えている。この2つのキーワードを大切にしつつ、今年度の研究の柱である「学級会を行う基盤づくり」にしっかりと取り組んでいくことを通して、児童の主体性を育成していきたいと考え、主題を設定した。

3. 基本的な考え方

本校の研究主題にある「主体的」とは、「知りたい・やってみたい・伝えたい」が溢れている状況を示すこととする。児童の実態である「受け身」では、この主体性は溢れていることはない。そこで、今年度から3年間の研究を経た児童のゴールイメージを学校や学級での生活（授業に限らず、休憩時間や掃除時間などあらゆる場面）の中で、「知りたい・やってみたい・伝えたい」が溢れるものにしていくという考えである。更に、「よりよく」とは、何かにチャレンジする状況を示すこととする。受け身な状態だと、「このままでいいか。」といった現状維持に陥る可能性も示唆される。学校の主役は児童一人一人である。何かにチャレンジすることで現状を打破することに繋がり、自分たちの手

で、学校をよりよくしていくことができることを実感してもらいたいという考えである。

先述したように、本校では学級活動（１）を中心に研究を進めていくが、キーワードは「自己肯定感・自己有用感の向上」である。まず「自己肯定感」とは「一人一人が自分の長所や自慢できること、短所や不十分なところも含めて、自分の存在意義を肯定し、さらに周りの人に自分を認めてもらうことによって生まれるものである。」と定義されている。次に「自己有用感」とは「他者の役に立った、他者に喜んでもらったときに生まれるものである。」と定義されている。本校の児童に見られる「受け身」という実態は、これら２つが低いからなのではないかと考えた。主体的に行動できる要因の１つとして、「自信をもっている」という要因が挙げられるのではないだろうか。その自信の背景には、自分をしっかりと理解していること、周りに認められた経験があること、他者の役に立ち喜んでもらったことなどが隠れていると考える。そこで、この２つを向上させることが、主体的に行動できる児童を育成することに繋がるのではないかと考えた。

4. 研究仮説

学級活動（１）を充実させることで、児童一人一人の自己肯定感・自己有用感を向上させることができるだろう。

5. 検証の視点と方法

（１）児童、教職員の意識調査

- ①前期（４月）・中期（１０月）・後期（１月）での児童の変容
- ②抽出児童（３名）の授業・振り返りの変容
- ③学級活動（１）における授業づくりについての教職員の変容

6. 研究計画

（１）学級活動（１）の充実

★学級会を行う基盤づくり キーワード【楽しむ】【揃える】

（２）研究組織（右記組織図参照）

- ・研究主任と副研究主任が中心となって教職員に共通認識を図る。

（３）研究の進め方

- ①全体研修（全員参加）※全３回を予定
 - ・全体研修は原則水曜日に行う。→当学級は授業数がプラス１
 - ・事前に指導案検討会を必ず設けることとする。

【例】

【指導案検討会】

- ・予想される児童の反応
- ・児童の困り感



【全体研修】

- ・児童をファシリテートすることができる。
- ・適切な教師の関わり方ができる。

②校内授業研修（参加者：管理職・教務主任・研究主任・副研究主任）

- ・２学期に必ず特別活動（学級会）の授業を行う。
- ・学習指導案起案の流れ
学年で作成⇒起案（１週間前を目処）⇒修正⇒職員全体へ配布（初任者研修の示範授業と兼ねてもよい。）
- ・協議会は上記の授業参観者で行う。（協議会の日程や記録は研究主任が調整する）

③校内理論研修（全員参加）

- ・４月に行う教職員調査から、研修内容を抽出し、教職員の共通認識を図る。

【例】

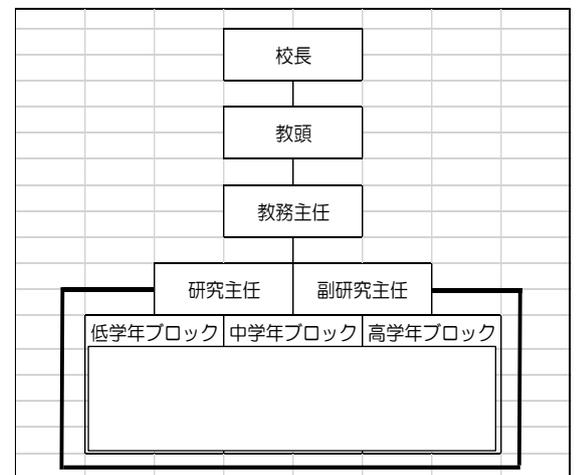
【教職員調査】

- ・どんな議題があがるのか？
- ・いつ準備をすればいいの？
- ・学級会の進め方が分からない。



【校内理論研修】

- ・教職員で身近な生活の中から課題を見付けてみる。
- ・学級会の日から逆算して、スケジュールを組む。
- ・教職員による模擬授業を経験する。（４月に予定）



R7 研修計画（4月19日現在）

最新版

実施日時	実施内容	備考
4月2日（水）	理論研修（研究構想） 研究の進め方	研究主任
4月19日（土）PM	理論研修（研究の詳細）アンケート 授業づくり（模擬授業）指導案	研究主任
5月15日（木）	理論研修①	研究主任・副研究主任
6月11日（水）	全体研修①【6年1組】	講師 <input type="text"/>
6月19日（木）	理論研修②	研究主任・副研究主任
7月23日（水）AM	理論研修③	研究主任・副研究主任
8月28日（木）AM	理論研修④	研究主任・副研究主任
9月11日（木）	理論研修⑤	研究主任・副研究主任
10月17日（金）	全体研修②【〇年〇組】	講師 <input type="text"/>
11月13日（木）	理論研修⑥	研究主任・副研究主任
12月23日（火）	理論研修⑦	研究主任・副研究主任
1月22日（木）	全体研修③【〇年〇組】	研究主任・副研究主任
1月29日（木）	理論研修⑧	講師 <input type="text"/>
2月10日（火）	理論研修⑨	研究主任・副研究主任
3月	研究のまとめ	研究主任

**2学期中に
特別活動
（学級会）の
授業を実施
すること。
（次項参照）**